法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

『歌仙大和抄』と本阿弥光悦流手本の刊行

YAMAGUCHI, Kyoko / 山口, 恭子

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

68

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

https://doi.org/10.15002/00010055

『歌仙大和抄』と本阿弥光悦流手本の刊行

はじめに

多くの名筆が摸刻され、紙上に再生されていった。書芸術の分野もその例外ではない。鑑賞用として、あるいは手本として、近世の出版の発展によって、文学・学問等、諸文化は広く開放された。

は当然のなりゆきであったといえる。
は当然のなりゆきであったといえる。
は当然のなりゆきであったといえる。
は当然のなりゆきであったといえる。
は当然のなりゆきであったといえる。
は当然のなりゆきであったといえる。

歌仙絵に、歌仙の略伝、和歌の注釈、ならびに歌意絵をとりあわせた、禄七年〈一六九四〉刊)の存在は興味深い。同書は、三十六歌仙の和歌・こうした光悦流の摸刻を考えるうえで、『歌仙大和抄』(二巻二冊。元

初学者向けの注釈書である。ことに特徴的であるのは、外題を「党哥仙

山

П

恭

子

光悦書風の散し書きによって刷られているという点である。

やまと抄」(国立国会図書館本下巻等)とするように、和歌三十六首が

「「光悦三十六歌仙」の余韻を強く感じさせる」と述べておられる。 お本淳氏は、嵯峨本の三十六歌仙版行後、その覆刻や追随作が続いたこ とについて、「「(稿者注、嵯峨本)光悦三十六歌仙」が与えたインパク とについて、「「(稿者注、嵯峨本)光悦三十六歌仙」が与えたインパク とについて、「「(稿者注、嵯峨本)光悦三十六歌仙」が与えたインパク

一方、『歌仙大和抄』が、三十六歌仙和歌の注釈書である以上、その注釈史上の位置付けについても当然留意すべきであろう。これについてま釈史上の位置付けについても当然留意すべきであろう。これについて注釈史上の位置付けについても当然留意すべきであろう。これについてさた。ただし、同書に対する伝本研究等は、必ずしもじゅうぶんではてきた。ただし、同書に対する伝本研究等は、必ずしもじゅうぶんではなかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流による三十六歌仙のこのように、これまで『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆なかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆なかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆なかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆なかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆なかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆なかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆なかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆なかったようにはいても、光悦流筆なかったようによります。

検討を加えておくことはあながち無用な試みではないだろう。 跡の流布という問題に新たな視座を与えてくれるものであり、 基礎的な

大和抄』をとらえてみたいと思う。 い。さらに、近世における光悦流手本の版行という視点からも、『歌仙 な報告を行う。 本稿では、『歌仙大和抄』について、まずは伝存本を整理し、 そのうえで、『歌仙金玉抄』からの流れを跡付けてみた 書誌的

『歌仙大和抄』の諸本と特徴

未詳である。 を収載する。 斎宮女御以下十九人の歌仙絵・和歌・歌仙の略伝・和歌の注釈・歌意絵 る。次いで下巻は全二十丁からなり、 以下十七人の歌仙絵・和歌・歌仙の略伝・和歌の注釈・歌意絵を収載す らなり、第一丁表に武陽桃仙子による序文、第一丁裏以降に、柿本人丸 まず、『歌仙大和抄』について概略を示しておく。上巻は全十八丁か このうち、 和歌が光悦流で刻されている(図1)。 第一丁表に口絵、第一丁裏以降に、 画工は

表には貫之の歌と歌仙絵が刻されるといったように、 歌意絵でさらに半丁が用いられており、それら一首ぶんの情報が見開き 人丸の歌・歌仙絵が、第二丁表に人丸の略伝・和歌の注釈・歌意絵が刻 に収められるということになる。紙面構成は、 その体裁を詳述すると、歌仙絵と和歌とで半丁が、略伝・和歌の注釈・ 絵抄とが、見開きの左右交互に入れ替わりながらあらわれる配置 続く第二丁裏には、紀貫之の略伝・和歌の注釈・歌意絵、第三丁 例えば、 和歌・歌仙絵、 上巻第一丁裏に



Image: TNM Image Archives (画像の無断複製を禁ずる)

武陽桃仙子序『歌仙大和抄』(東京国立博物館本)

になっている。

この『歌仙大和抄』は、どの程度流通したのだろうか。次に、『歌仙

大和抄』の伝存本について整理したい。

これまで管見にはいった『歌仙大和抄』は、以下のとおりである。

元禄七年(一六九四)刊本

文庫目録』に『和歌三十六歌仙』として登録されるもの)・都立中央図書館加賀文庫蔵(加賀文庫七〇九五)存下巻(『加賀

元禄九年(一六九六)印本

- 東京国立博物館蔵(と二一〇四)
- 国立国会図書館蔵(二一四—一一六)
- 国文学研究資料館蔵(ナニ―五二七)
- 四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵(恩八三四)存下巻

刊年不明

・弘前市立弘前図書館蔵(W九一一・一―四七)存上巻

まず、元禄七年刊本については、右掲のとおり、現段階では加賀文庫

はあるが、左に書誌を記しておく。本を確認したにすぎない。この加賀文庫本は下巻一冊が伝存するのみで

都立中央図書館加賀文庫蔵(加賀文庫七〇九五)存下巻一冊

記「元禄甲戌孟春吉旦/武江呉服町二丁目書肆/伊勢屋孫三郎梓」。綴じが深いが、「哥ノゑ十一」下」などと刷るのを確認しうる。刊進辺(二十一・六×十五・四糎)。丁付けが各丁表のど付近にあり、表紙中央、題簽の剥落跡に「和歌三十六哥仙 全」と打付書。四周原装茶色草花文様表紙(二十六・九×十八・九糎)。原題簽は欠失。

なお、漆山又四郎『絵本年表』には以下の記載がある。印記「近藤林/蔵置印」「加賀文庫」「東京都/立図書/館蔵書」。

三十六歌仙 大本二冊 三十六丁 元禄甲戌孟春吉旦

画工不明 光悦風之書

序武陽桃仙子

武江呉服町二丁目

伊勢屋孫三郎梓

籍展観大入札会目録』に、「恍歌仙大和抄」として、この伊勢屋版が掲ろう。また、鈴木淳氏も言及されているように、平成二十一年度『古典書名こそ異なるものの、『歌仙大和抄』元禄七年刊本を指すものであ

にもとづいて、書誌を記す。 次に、元禄九年印本についてみてゆこう。まずは、東京国立博物館本 載されている。

東京国立博物館蔵(と二一〇四)二巻二冊

郭に入れ木によると見られるずれあり。 下巻に「「哥ゑ十四」下」などと刻す。刊記「元禄九丙兵歳卯月吉祥 原表紙の上に後補朱色表紙が付されており、中央に「哥仙大和抄 央の原題簽に「世哥仙大和抄 之印」「徳川宗敬氏寄贈」等。 日/江戸橋中通川瀬石町山口屋/須藤権兵衛開版」。 上 原装水色草水鳥文様表紙(二十六・九×十八・五糎)。 (歌仙大和抄 丁付けが各丁表のど付近にわずかに見え、上巻に 「哥ゑノ一 下)」と打付書。四周単辺(二十一・三×十五・四 上」と刻す。下巻題簽は欠失。なお、 印記 国立博 刊記部分の /物館図/書 上巻表紙中

。須藤権兵衛は、先立つ伊勢屋孫三郎版の版木を入手し、刊記部分に先の元禄七年刊本と、この元禄九年印本下巻とは、刊記以外同版であ

る。

が理解できよう。

年印本のうち、東京国立博物館本、国立国会図書館本、国文学研究資料入れ木を施したうえで本版を刊行したのであろう。なお、管見の元禄九

館本は、すべて同版と判断できる。

元禄九年印本にある「江戸橋中通川瀬石町」を欠くということである。記を「元禄九西」歳卯月吉祥日/山口屋/須藤権兵衛開版」とし、他の方に、「哥仙やまと抄」の文字が刻されていること、二点目として、刊ただし、四天王寺大学図書館恩頼堂文庫本については、以下の点でやただし、四天王寺大学図書館恩頼堂文庫本については、以下の点でや

少なくとも外題角書をあらためたうえで版行されたらしいこともうかが徳四年(一七一四)には、日本橋南仲通一丁目へ移転していることが認徳四年(一七一四)には、日本橋南仲通一丁目へ移転していることが認志の「江戸橋中通川瀬石町」を削り、さらに、それまでにはなかった口記の「江戸橋中通川瀬石町」を削り、さらに、それまでにはなかった口記の「江戸橋中通川瀬石町」を削り、さらに、それまでにはなかった口記の「江戸橋中通川瀬石町横町に所在、後、宝永四年(一七○七)、正ころに江戸日本橋川瀬石町横町に所在、後、宝永四年(一七○七)、正

ことがわかる。元禄期を中心に、相応の需要があった書物であったことた伝本は比較的少ないものの、数次にわたって版行が繰り返されていた以上、『歌仙大和抄』伝存本について眺めてきた。これまで確認しえ

える。

『歌仙大和抄』所収和歌について

同書の本文内容、とくに所収された和歌について確認してゆきたい。これまで、『歌仙大和抄』の伝本の様相について眺めてきたが、次に、

は底本のままとし、私に通し番号を付した。収録の和歌三十六首を、以下、東京国立博物館本に基づき記す。

表記

(上巻)

須藤権兵衛は、元禄・宝永

『改訂増補近世書林板元総覧』によると、

一、左 柿本人丸 ほの~~とあかしのうらの朝霧に嶋かくれ行ふ

ねおしそ思ふ

二、右 紀貫之 桜ちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪そ降

ける

三、左 凡河内躬恒 いつくとも春のひかりはわかなくにまたみよ

し野の山はゆきふる

四、右 伊勢 三輪の山いかにまちみむ年ふ共たつぬる人もあらし

と思へは

五、左 中納言家持 はるの野にあさるき、すの妻恋にをのかあり

かをそことしれつゝ

六、右 山邊赤人 和歌の浦にしほみちくれはかたを波あしへをさ

して田鶴鳴わたる

七、左 在原業平 世中にたえてさくらのなかりせは春の心はのと

けからまし

『歌仙大和抄』と本阿弥光悦流手本の刊行

三十、右 藤原元真 咲にけりわか山里の卯の花は垣根にきえぬ雪	よりしらへ染けん
く成まさる也	十八、左 斎宮女御 琴の音にみねのまつかせ通ふらしいつれの緒
二十九、左 坂上是則 みよし野の山のしら雪つもるらし故郷さむ	(下巻)
からうつしてし哉	めしに何をひかまし
二十八、右 清原元輔 秋の野のはきのにしきを我宿にしかの音な	十七、右 壬生忠岑 ねのひする野邊に小松のなかりせは千代のた
何てふかひかあるへき	かまほしさに
二十七、左 権中納言敦忠 伊勢の海ちいろの濱にひろふとも今は	十六、左 源公忠朝臣 行やらて山路くらしつ郭公いま一こゑのき
をもうらみさらまし	くもすめる月かな
二十六、右 中納言朝忠 あふ事の絶てしなくは中~~に人をも身	十五、右 藤原高光 かくはかりへかたくみゆる世中にうらやまし
もなか成ける	の友ならなくに
二十五、右 源順 水の面にてる月なみをかそふれはこよひそ秋の	十四、左 藤原興風 誰をかもしる人にせんたかさこの松もむかし
井にかへらさるへき	かとそ聞
二十四、左 藤原清正 天津風ふけゐのうらにゐる田鶴のなとか雲	十三、左 中納言兼輔 みしか夜の更行まゝに高砂のみねの松風吹
をきみみさらめや	あらはいなむとそおもふ
二十三、右 源信明朝臣 恋しさはおなし心にあらすとも今宵の月	十二、右 小野小町 わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水
しほの色まさりけり	よふこ鳥哉
二十二、左 源宗于朝臣 常盤なる松のみとりも春くれはいまひと	十一、左 猿丸大夫 遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくも
もふ比哉	りなく也
二十一、右 源重之 風をいたみ岩うつ浪の己のみくたけて物をお	十、右 紀友則 ゆふされは佐保の川原の川風に友まとはしてちと
おとろかれぬる	しき成ける
二十、左 藤原敏行 秋きぬとめにはさやかに見えね共風の音にそ	九、左 素性法師 見わたせは柳さくらをこきませて都そはるのに
くともつきし君かよはひは	はなてすや有けん
十九、右 大中臣頼基朝臣 一ふしに千代をこめたるつえなれはつ	八、右 僧正遍昭 たらちねはかゝれとてしもむは珠の我くろかみ

と見るまて

くる侘しきかつらきの神三十一、左 三条院女蔵人左近 岩橋の夜のちきりもたえぬへしあ

三十二、右 藤原仲文 有明の月のひかりを待ほとに我夜のいたく

三十三、左 大中臣能信朝臣 千年まてかきれる松もけふよりは君ふけにける哉

にひかれて万代やへむ三十三、左 大中臣能信朝臣 千年まてかきれる松もけふよりは君

にまかせたらなん 三十四、右 壬生忠見 焼す共草はもえなん春日野はたゝはるの日

三十六、右 中務 秋風の吹につけても問ぬ哉おきの葉ならは音はもにそ有ける

してまし

三十五、

左

平兼盛

くれて行秋の形見におく物は吾もとゆひのし

一首歌仙本「三十六人歌合」に所収された和歌三十六首の組み合わせには、多くのバリエーションがあることが知られているが、その系統にでは、多くのバリエーションがあることが知られているが、その系統におられるが、この分類にしたがえば、『歌仙大和抄』所収和歌は、下河おられるが、この分類にしたがえば、『歌仙大和抄』所収和歌は、下河おられるが、この分類にしたがえば、『歌仙大和抄』所収和歌は、下河おられるが、この分類にしたがえば、『歌仙大和抄』所収和歌は、下河おられるが、高い世界がある。

示しているわけではない。『歌仙抄』を承けて成立した、同じく「歌仙ただし、これは、『歌仙大和抄』が『歌仙抄』に直接依拠したことを

これらの点も、 えて、 抄型 野は」としている点である。この三点について『歌仙大和抄』をみてみ 対し、『歌仙金玉抄』では「そことしれつゝ」にしている点、 『歌仙抄』と『歌仙金玉抄』の和歌を比較すると、若干の異同がある。 ものであろう。 和抄』はともに「能信」としており(『歌仙抄』では「能宣」とする)、 ると、右掲のとおり、いずれも『歌仙金玉抄』と同型となっている。 『歌仙抄』では「春日野を」とするのに対し、『歌仙金玉抄』では「春日 玉抄』では「我宿に」としている点、そして、第三に、忠見歌第三句を、 元輔歌の第三句を、『歌仙抄』では「故郷に」とするのに対し、『歌仙金 第一に、 大中臣「能宣」と表記するべきところを、『歌仙金玉抄』『歌仙大 の 家持歌第五句を、『歌仙抄』では「人にしれつゝ」とするのに 『歌仙金玉抄』にならった結果とみるべきであろう。 『歌仙金玉抄』と『歌仙大和抄』の近さをうかがわせる なお、 加

そのまま踏襲したと想像できるだろう。さらに、『歌仙大和抄』の書替 について一切説明されておらず、 つまり書替歌を載せているのである。『歌仙大和抄』序文には、 ションがあることを示したうえで、各歌につき四首ずつ「かはり歌」、 もともにかきのせ侍者也」と、三十六歌仙の歌の組み合わせにはバリエー 前のゑ屛風障子等にかくときかはり有は是故なりしかれば其かはり哥を 文にあたる「大意」に、「哥仙に五種の哥ありてさまぐ~にかけり。 金玉抄』を原拠とすると思われる。 兼輔に二首、兼輔以外の歌仙には一首ずつ載せるが、この点も、『歌仙 また、『歌仙大和抄』は、 右掲三十六首のほかに書替歌なるものを、 それだけに、 というのも、『歌仙金玉抄』 『歌仙金玉抄』 の方針 神 序

いる和歌に該当する。書替歌の選択においても、『歌仙大和抄』は、『歌られている和歌であり、兼輔に関しては、一首め・二首めに掲げられて歌は、兼輔以外はすべて、『歌仙金玉抄』書替歌の四首中、最初に掲げ

仙金玉抄』に依拠しているといえそうである。

三 『歌仙金玉抄』から『歌仙大和抄』へ

にあると考えられよう。 ご指摘のように、『歌仙大和抄』は、 載せており、 に言及した。 書替歌の存在、 『歌仙大和抄』を『歌仙金玉抄』と比べれば、 前章において、 また、 『歌仙金玉抄』も、 絵抄としての全体像そのものが、 注釈文は、 しかしながら、その影響は、 ならびにその選択が、『歌仙金玉抄』によるだろうこと 『歌仙大和抄』 かなり簡潔なものとなってはいるが、新藤氏の 各歌に、 所収和歌を確認するなかで、 先行する『歌仙金玉抄』の影響下 歌仙絵・略伝・注釈・歌意絵を おそらく所収和歌だけにとど 両書の関連を想像させる。 歌仙絵や歌意絵は同一で 所収和歌、

『歌仙金玉抄』から『歌仙大和抄』への流れを跡付けてみたい。 そこで本章では、『歌仙大和抄』の制作や刊行について探るために、

る。これに導かれつつ若干の補足をすれば、以下のように整理される。都大学蔵大惣本稀書集成』第十巻所収「解題」においてまとめられてい要がある。『歌仙金玉抄』の諸本については、すでに藤原英城氏が、『京そのためにはまず、『歌仙金玉抄』伝存本についても整理しておく必

天和二年(一六八二)刊 山形屋版 一冊

『歌仙大和抄』と本阿弥光悦流手本の刊行

• 天和三年(一六八三)刊 金屋半右衛門版 二巻二冊

貞享元年(一六八四)刊 松会版 三巻三冊

の絵本・絵入本目録』による。吉田幸一氏、および藤原氏が、伝存本はこのうち、山形屋版は、『好色ひともと薄』所収デューレー編『日本

未確認とされているもので、

稿者も未見である。

ある。 ただし、 はほぼ同じで、三十六首の和歌の散らし方、使用字母も共通している。 は三巻巻頭にそれぞれ収めており、 ている。 わずかながら差異があること、 本文内容としては、 したがって、当面問題となるのは、 巻数や判型、 また、金屋版が上巻巻頭にのみ口絵を収めるのに対し、 和歌の収録順に差があること、 歌仙絵、 歌意絵、 仮名遣い等の表記に違いがあること以外 その図像も金屋版とは別種のもので 金屋版、松会版となる。 および紙面構成は大きく異なっ また、 注釈の文章に 両版は、 松会版

ととする。 以下、それぞれの特徴を記しつつ、両版の差を具体的に示してゆくこ

館 東京芸術大学脇本文庫、 京都大学附属図書館、 東京国立博物館、 まず、 (存上巻)、 金屋版であるが、 国文学研究資料館 国立国会図書館、 西尾市岩瀬文庫、刈谷市図書館、 新潟大学佐野文庫、 本版は伝本が多い。 (存下巻) 都立中央図書館加賀文庫 に所蔵がある。 内藤記念くすり博物館図 管見のものに限っても、 麗澤大学図書館

東京国立博物館蔵(と九七六六)二巻二冊

本稿にも東京国立博物館本によって示しておきたい。

の都合上、

この金屋版の書誌については、

藤原氏も詳しく記されているが、

行論

四十一 門 行板 略伝・注釈・歌意絵を収載。 下巻全十九丁、第一丁表以降に、忠岑以下十九人の歌仙絵・和歌 裏から二丁裏に山雲子こと坂内直頼による「大意」、第三丁表以降 す。四周単辺(二十三・二×表裏通三十四・八糎)。丁付けは各丁裏 書之印 のど付近に、上巻、一 欠、下巻表紙中央の双辺刷枠原題簽に「窓岡子仙金玉鈔 原装雷文繫地卷竜文樣表紙 人丸以下十七人の歌仙絵・和歌・略伝・注釈・歌意絵を収載。 印記 (―四十八)|と刻す。上巻全十九丁、第一丁表に口絵、一丁 「城端瑞泉寺」「徳川宗敬氏寄贈」「国立博/物館図 (—十九) 、下巻、|二十 (二十五・九×十九・一糎)。 刊記「天和三歳五月吉辰/金屋半右衛 (一廿九) 下」と刻 卅四十、 上巻題簽

書替歌は裏丁に位置する場合もある(図2)。に歌仙絵と歌意絵とを各々刻し、続く裏丁に注釈を載せている。ただし、構成にし、上段に略伝と書替歌四首を、中段に和歌の散し書きを、下段紙面構成としては、各歌仙に一丁があてられる形となる。表丁を三段

一方、松会版については、諫早市立諫早図書館本、堺市中央図書館本、石が刻されており、本版が、金屋版の翌年には刊行されていたことがにいたの書館本、東北大学附属図書館狩野文庫本、中京大学図書館本がのかる。

「大、松会版については、諫早市立諫早図書館本、堺市中央図書館本、わかる。

「会別」

「おり、本版が、金屋版の翌年には刊行されていたことがのかる。

「おり、本版が、金屋版の翌年には刊行されていたことがのかる。

「おり、本版が、金屋版の翌年には刊行されていたことがのかる。

「おりである。

諫早市立諫早図書館蔵(二一二諫一二六)三巻三冊

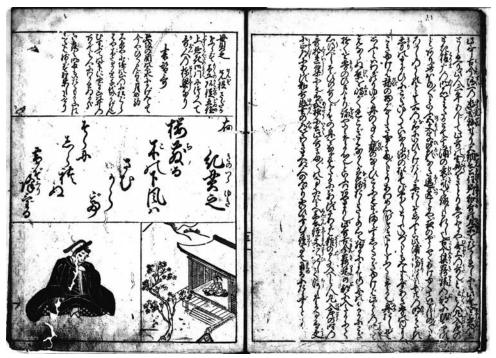
仙金玉抄 盛恩 上(―下)」と刻す。ただし、下巻のみ、表紙左肩原装紺色表紙(十九・一×十三・六糎)。表紙中央の原題簽に「哥

蔵書記」。 意絵を収載。 第一丁裏以降に、 和歌・略伝・注釈・歌意絵を収載。下巻全十二丁、第一丁表に口絵、 下十三人の歌仙絵・和歌・略伝・注釈・歌意絵を収載。 下虫損により欠失)」と刻す。上巻全十五丁、第一丁表に口絵、 中四(—中十四)」、下巻「下一(二)、下又二、下三(—下八。以 (三)」「上ノ四(一八)」「上九(一十五)」、中巻「中一、中二三、 に貼付されなおされる。四周単辺 丁、第一丁表に口絵、 右別郭の丁もあり。版心に丁付けがあり、上巻「上ノ一」「上二 丁裏・二丁表に山雲子による「大意」、第二丁裏以降に、人丸以 刊記「貞享元甲子七月日 朝忠以下十一人の歌仙絵・和歌・略伝・注釈・歌 第一丁裏以降に、興風以下十二人の歌仙絵 (十四・七×十二糎)。 松會開刊」。 印記 中巻全十三 ただし左 |諫早市

るのみで年記を欠いている。なお、諫早図書館本以外の伝本は、刊記に「七月日 松會開刊」とあ

松会版の紙面構成は、金屋版とは異なり、見開きに各歌仙があてられ松会版の紙面構成は、金屋版とは異なり、段組みの構成はとらない。見開きを話す。これらの余白部分を使って、歌人略伝・注釈・書替歌を刻す絵を描く。これらの余白部分を使って、歌人略伝・注釈・書替歌を刻すという体裁である(図3)。

六五八―八四)までは、主として京都で出版された草紙類を、仮名文字めも窮屈な印象を与える。松会は、「万治・寛文・延宝・天和年間(一また、金屋版が大本であったのに対し、松会版では中本となり、字詰



上巻第1丁裏/2丁表



上巻第2丁裏/3丁表

Image: TNM Image Archives (画像の無断複製を禁ずる)



起因すると見るのが穏当であろう。

興風、 になるのが通常であるから、この差は、 違いがあることを先述したが、その違いは、 が手がかりを与えてくれる。 参照したのはいずれであったのか。このことについては、 えて版行した一例ということになるだろう。 えて刊行」するのが常套であった。 を多用し、 このように、 朝忠、敦忠歌の位置である。三十六歌仙和歌は、 一面の行数を増加させ、 異版のある『歌仙金玉抄』であるが、 金屋版と松会版の間には、 挿絵を師宣風にするなどと版式を変 『歌仙金玉抄』も同様に、 松会版の編纂時における錯誤に 後掲の表に示したとおり、 『歌仙大和抄』 和歌の収録順に 金屋版の収録順 和歌の収録順 版式を変 が

たのであろう。 おいて左歌人、あるいは右歌人が連続するという配列が生じることになっ に依拠しつつも二冊本として編纂された『歌仙大和抄』では、 右歌人が連続するといったことは意識されにくい。 が中巻の巻頭に、朝忠が下巻の巻頭に位置しており、 金玉抄』に拠ったためにほかならない。三冊本である松会版では、 かに不自然な体裁であるが、これは、『歌仙大和抄』 で左歌人が続き、また、 するということである。『歌仙大和抄』は、 注目したいのは、『歌仙大和抄』の和歌収録順も、 下巻の順、 朝忠のところで右歌人が続く。 上巻の兼輔、 しかし、この松会版 左歌人が連続する、 この松会版と一致 が、 松会版 興風のところ 同巻内に 『歌仙 興風 明ら

孫三郎にとって、 の翌年、 先述のように、松会は、 版式を変えて江戸で売り出した。 同じ江戸の松会版がより身近なものであったことは想 京において刊行された 『歌仙大和抄』 『歌仙金玉抄』 版元の伊勢屋 を、 そ

書館蔵

るという体裁にもヒントを得たのかもしれない。のう。このとき、松会版における、一首の情報をすべて見開きに収載するう。このとき、松会版における、一首の情報をすべて見開きに収載するが、金ま抄』をよりどころとしたのは、ごく自然な営為であったのだ像にかたくない。三十六歌仙和歌の絵抄を版行するにあたり、松会版

会版 における光悦流手本の刊行状況について眺めてみたい。 野にいれておく必要があるのではないか。 景として、本阿弥光悦流筆跡そのものに対する当時の需要についても視 ころが大きいだろう。 指摘されるように、「「光悦三十六歌仙」が与えたインパクト」によると う要素が付け加えられているのである。伊勢屋のこの試みは、鈴木氏が どまるものではない。 会版の影響下にあると考えられる。 このように、『歌仙大和抄』は、 『歌仙金玉抄』を簡略化した三十六歌仙絵抄というだけの位置にと 『歌仙大和抄』には、新たに、「光悦流筆跡」とい しかし、このような書物が開版されるに至った背 先行する『歌仙金玉抄』、とりわけ松 しかし、『歌仙大和抄』は、 以下、 章をあらためて、 単に松 近世

四 光悦流手本の刊行と『歌仙大和抄』

ならびにその筆跡が収められる名筆集を列記してみたい。このことを探るため、光悦筆跡であることを明示して売りだされた手本、正世前期、光悦流筆跡に対する需要はどれほどであったのか。以下、

•『本朝名公墨宝』(正保二年〈一六四五〉刊)三巻三冊(堺市中央図

伝本は多いが、堺市中央図書館本等が初刻とみられ、年記「正保二

冊に十八名の能書の筆跡を輯刻する名筆集。光悦筆跡は中巻に収め年仲冬日」、後表紙見返に「新刊于洛陽四条立売」を刻す。三巻三

『貫道筆集』(正保三年〈一六四六〉刊)一冊(内藤記念くすり博物

館図書館蔵)

6

ń

和歌七首が摸刻される。

跡として、詩三首、和歌六首が摸刻される。王羲之、および日本の能書九名の筆跡を輯刻する名筆集。光悦の筆刊記「于時正保三年正月吉日/平野屋十衛門/右開版堀川通下立売」。

- 刊記「慶安四年仲秋日開板/京 二條御幸町五倫書屋/大坂 『御手鑑』(慶安四年〈一六五一〉刊)一帖(国立国会図書館蔵
- •『和漢筆仙集』(貞享二年〈一六八五〉刊)三巻三冊(秋田県立図書一首が刻される。

よび六一六枚の短冊を刻したもの。

光悦の筆跡として短冊型に和歌

町平野硯屋福本

/江戸

南伝馬町紀伊国屋」。

一三六枚の古筆、

ず、堺筋

館蔵)

される。
される。
される。
される。
される。

- 書館本館蔵)
 『大虚菴光悦法書』(貞享四年〈一六八七〉)二巻二冊(岐阜市立図
- 乾巻に詩十二首、坤巻に和歌十九首が摸刻される。坤巻最終丁に刊記「貞享」県林鐘中旬 洛下書林植村藤右衛門」(乾巻最終丁)。

『歌仙大和抄』と本阿弥光悦流手本の刊行

を除き、

記しておく。

•『光悦流消息 星』(元禄十一年〈一六九八〉刊)三巻三冊のうちの

一(糸魚川市歴史民俗資料館蔵)

漢数字「一―十百」が摸刻される。
る。消息文に加え、巻末にいろはうたと変体仮名をならべ、さらに、開版」。同書のほか、『近衛流消息 日』『定家流消息 月』からな開版「維時元禄十一戊寅年孟春日/御書物屋/出雲寺和泉掾元房

・〔光悦流消息〕一巻一帖(内藤記念くすり博物館図書館蔵)

三十四首が摸刻される。在折本に装丁されるが、もと袋綴装であったか。詩二十八首、和歌外題・内題・刊記なし(右掲の題は後補表紙の打付書による)。現

• [本朝三跡帖/文武名家筆跡] 一帖(西尾市岩瀬文庫)

光悦の筆跡として短冊型に和歌一首が摸刻される。正面刷り。日本の能書、武家、文学者らの筆跡を輯刻する名筆集。外題・内題・刊記なし(右掲の題は『岩瀬文庫図書目録』による)。

れている。

素庵の筆跡を収録した『光流四墨』が、延宝三年(一六七五)に刊行さ素の筆跡を収録した『光流四墨』が、延宝三年(一六七五)に刊行さこのほか、披見していないものの、光悦、尾形宗柏、秋葉工庵、角倉

内容の判断が難しいが、明らかに右の掲出書と重複すると思われるもの内容の判断が難しいが、明らかに右の掲出書と重複すると思われるもの近世の書籍目録からも、光悦流手本を掲出してみよう。書名のみでは

寛文十年(一六七〇)刊『増補書籍目録

- ・『光悦手本』
- •『歌仙』尊円 式部卿 光悦
- •『百人一首』大本 中本 小本 尊円 式部卿 伝内 当

元禄五年(一六九二)刊『広益書籍目録

- 『同(光悦)法書』
- /尊円 瀧本 伝内 光悦 近衛 行能・『同(和漢朗詠集)』無ゑ 点付 かな付 まかな付 真草 大字

享保十四年(一七二九)永田長調兵衛刊『新撰書籍目録

- 『光悦詩歌手本』
- 『光悦歌仙』

けに、 の筆跡に対する需要の高さを示すものとして注目しておいてよいだろう。 集』の和歌が摸刻されている例がある。とくに、光悦流の歌書が、 歌が、『大虚菴光悦法書』坤巻には、同じく『新古今和歌集』『古今和歌 いうのが比較的コンパクトなまとまりであるということ、また、それだ た。三十六歌仙は、 た瀧本流の祖松花堂昭乗らの書とならんで摸刻されていることは、光悦 流として広く学ばれた尊円親王や、近世を通じて多くの手本が刊行され や『和漢朗詠集』のほか、『本朝名公墨宝』には『新古今和歌集』の和 や漢詩、 むろん、三十六歌仙和歌も、 さまざまな光悦流手本が刊行されており、その内容としては、消息文 紙面を大きく用いて散し書きの様々なバリエーションも示しやす 歌書などバリエーションに富む。 いずれも有名な歌人であるということ、三十六首と 版本手本の素材として多く用いられてい 歌書でいえば、『百人一首

尊円親王や、 いということ、そして、もとより三十六歌仙和歌が書芸術と関係が深く、 いう伝統も、 その背景にある 近衛前久、同信尹、 昭乗ら、 多くの能書が揮毫してきたと

は は 趣向ではなかったか。 歌にまつわる様々な情報や教養を、ともに提示し一覧できるようにした 向けの和歌注釈書であった『歌仙大和抄』に、 する需要をも見込んでのものであったのだろう。 うかがわせる。 諸流」には、「光悦流」の項目がたてられており、光悦書風の広がりを 術の関係を視野にいれれば、伊勢屋が三十六歌仙の注釈書を開版するに このような、 読者層を視野にいれての試みであったともとらえられる。 おりしも、 当時多かった光悦流手本の版行をも視野に入れたものではなかった 光悦流を採用した意図がみえてこよう。『歌仙大和抄』の制作 『歌仙大和抄』の版行は、 種々の光悦流手本の刊行状況や、三十六歌仙和歌と書芸 元禄七年に刊行された『万宝全書』「本朝古今名公古筆 広く光悦の筆跡そのものに対 書の要素を付載すること 加えていえば、 当該の和 初学者

ているといえるであろう。 江戸における光悦流流通の起点という意味でも、 書肆が光悦流を開版したごく早い時期の書物であったと思しい。 先に光悦流手本の刊行状況を概観したが、『歌仙大和抄』 少なからぬ意味をもっ は、 同書は、 江戸の

序文・和歌・歌仙絵を抜きだしたもので、 蔵)という別書を派生させている。『光悦歌仙』は、 元禄九年須藤権兵衛の刊記をもつ。 『歌仙大和抄』は、 後に『光悦歌仙』(一冊。 国文学研究資料館本は、 東京国立博物館本等と同じ、 『歌仙大和抄』から、 国文学研究資料館 『歌仙大和

> 抄 仙大和抄』刊行後、 の書肆万屋作右衛門求版本であるという。 と内容を同じくすると思われる。 『新版歌仙』(一冊。 元禄九年印本の序文・和歌・歌仙絵・ 再編されたものとみてよい。さらに、 寛保三年 (一七四三) 小松氏によれば、 刊記部分と同版であり、 刊²⁹ ţ 『新版歌仙』 この『光悦歌仙 小松茂美氏所 は、 京

蔵

がら、 絵抄と切り離され、 いて『新版歌仙』が出されていたことも興味深い。 おいて反響を呼んだことを想像させる。 こうした『光悦歌仙』の存在は、『歌仙大和抄』 迎えられ続けていったのである。 光悦流がクローズアップされる形でその姿を変えな さらには、 が、 五十年後の京都にお 『歌仙大和抄』 元禄期の江 戸に

おわりに

きた。 して、 が、松会版『歌仙金玉抄』に基づくこと、 以上、『歌仙大和抄』の伝存本の様相を整理したうえで、『歌仙大和抄』 光悦流に対する需要の高まりもあげられるであろうことを述べて また、 刊行の背景のひとつと

と結びつきながら、そして、 もしれない。 置付けにある該書は、 すことができると考える。 いるが、『歌仙大和抄』 稿者は、 近世の印刷の発展による書文化の広がりに関し検討を重ねて しかしながら、 書研究においては見落とされがちな資料であるか のような出版物にも、 あくまでも三十六歌仙和歌の注釈書という位 諸分野と取り合わせられながら、 こうした資料こそ、 新たな解明の視点を見出 近世の書文化が、 実に多様 出版

な形で人々に享受されていった様相を教えてくれているのではないだろ

注

- 1 を光悦と想定するものではなく、あくまでも「光悦流」で摸刻され、 「光悦」と銘打って刊行・流通していたという点を重視している。 本稿でとりあげる『歌仙大和抄』、ならびに光悦流手本は、 版下の筆者 当時
- 2 三七〇年記念角倉素庵 ―― 光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で ――』 の軌跡 ―― その書跡と書誌学的業績について ――」大和文華館図録『没後 仙」の版下を素庵が書いたものとの見解を示しておられる(林進氏「素庵 配列、写し間違い、および書風が同じであることから、嵯峨本「三十六歌 る『「百人一首・尊円本「三十六人歌合」』(東京国立博物館蔵)の和歌、 ○○七年五月)。 〈大和文華館、二〇〇二年〉、「天理図書館所蔵の嵯峨本『三十六人歌合』 林進氏は、嵯峨本「三十六歌仙」と、角倉家に伝来し角倉素庵筆とされ -その依拠本と本文版下の筆者について ――」『ビブリア』 一二七号、二
- 二○一○年〉)、および同書図版解説。以下、本稿における鈴木氏のご研究 通したかを知る事が出来る」と述べておられる(『増補古活字版之研究』 仙絵本が多く出版されたことについて、「如何当時、光悦書風の歌仙が流 の引用は、すべて同書による。なお、川瀬一馬氏も、嵯峨本以降三十六歌 の歌仙絵 ―― 絵本にみる王朝美の変容と創意 ――』〈国文学研究資料館〈 〈ABAJ、一九六七年〉)。 鈴木淳氏「光悦三十六歌仙考」(国文学研究資料館特別展示図録『江戸
- 4 〇〇四年)。 新藤協三氏「『歌仙繪抄』翻刻・解説」(『三十六歌仙叢考』新典社、二
- 5 桃仙子については未詳。『歌仙大和抄』序文は以下のとおり。 世のうきを思。夏の日の。うたゝね。冬の夜の。夢心地にも。千里の いまあらたに。歌の心を。絵にあらはして。とことはの。花紅葉に。 此三十六哥仙は四条大納言いにしへの名人をあけて。ゑらまれし也。

外まて。遊ひありくやうに覚え。しかのみならす。 のたからのやまと抄といはんもむへなり。武陽桃仙子序 あはれみては。放埓の心をも。やむへきことはりあり。 あさるきゝすの哥

漆山又四郎『絵本年表』一(青裳堂書店、一九八三年)。

6

8

- 7 『古典籍展観大入札会目録』(東京古典会、二〇〇九年)。
- できる。すなわち、歌仙絵丁には「哥ノ(数字)」、絵抄丁には 下巻には「「哥ノゑ十一 |下」「「哥ゑ十四」下」などと刻されているのが確認 また、絵抄丁上巻には、「

 | 哥ゑノ一 | 」「

 | 哥ゑノ二 (一九) | 」また、 いずれも、数字は上巻から下巻へ通し番号となっている。 資料館本の歌仙絵丁上巻には、 (数字)」「哥ノゑ(数字)」「哥ゑ(数字)」と刻されていたのであろう。 丁付けに関して、 国文学研究資料館本に依拠して補足する。 「哥ノ三」、同じく下巻には、 一哥ノ十四 国文学研究
- 9 みる王朝美の変容と創意 ――』には、元禄十三年求版本と解説される。 国文学研究資料館本について、注(3)前掲書『江戸の歌仙絵 --- 絵本に
- 11 10 井上隆明氏『改訂増補近世書林板元總覧』(青裳堂書店、一九九八年)。 新藤協三氏「一首歌仙本『三十六人歌合』の諸形態」(注(4)前掲書)。
- 12 嵯峨本「光悦三十六歌仙」とは本文が異なる。
- 13 抄』私見 ―― 歌仙和歌の一系統としての位置付け ――」(『江戸初期の三十 六歌仙 光琳・乾山・永納』〈翰林書房、一九九六年〉〉に詳しい。 『歌仙抄』と『歌仙金玉抄』の関係については、蔵中スミ氏「『歌仙金玉
- (4) ただし、これらは『歌仙金玉抄』『歌仙大和抄』のみに見られる句型で 〈一六六三〉跋。有吉保編『三部抄増註 三十六歌仙和歌抄』〈『加藤磐斎 はない。家持歌については、加藤磐斎『三十六歌仙和歌抄』(万治三年 いる例などがある。 元輔歌については、近衛信尋筆『三十六人歌合』が「わがやどに」として 古注釈集成』六。新典社、一九八五年〉による)が「そことしれつゝ」、
- 15 京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵大惣本稀書集成』第 (臨川書店、一九九五年)。
- 16 の絵本・絵入本目録』における元禄期以前の絵入本私考」。 『好色ひともと薄』(古典文庫、一九八五年)所収「デューレー -編『日本

五月雨の徒然にしるし畢ぬ」を削るという処置もなされている。(17) 松会版『歌仙金玉抄』「大意」では、金屋版「大意」文末の「天和三年

27

- (8) このうち、刈谷市図書館本、麗澤大学図書館本、東京芸術大学脇本文庫で、各々収められている。
- 二〇〇四年)に詳しい。 伝について」(『近世前期文学研究 ―― 伝記・書誌・出版 ――』若草書房、9) 山雲子こと坂内直頼については、塩村耕氏「俗学者、山雲子坂内直頼の

28

- 中京大学図書館本は、国文学研究資料館マイクロフィルムによる。(20) このうち、東北大学附属図書館狩野文庫本は狩野文庫マイクロフィルム、
- 書館蔵『歌仙金玉抄』刊記の写真が掲載される。 (1) 柏崎順子氏編『増補松会版書目』(青裳堂書店、二〇〇九年)に諫早図
- (22) 『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九九年)。
- 24) 注(2)前掲書『没後三七○年記念角倉素庵──光悦・宗達・尾張徳川義2) 注(2)前掲書『没後三七○年記念角倉素庵 ── 光悦・宗達・尾張徳川義2) 注(2)前掲書『没後三七○年記念角倉素庵 ── 光悦・宗達・尾張徳川義2) 注(2)前掲書『没後三七○年記念角倉素庵 ── 光悦・宗達・尾張徳川義2
- (井上書房、一九六三年)。以下の近世書籍目録もこれによる。(35) 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』
- 書きで和歌を摸刻している。

 (26) 松花堂昭乗の瀧本流を例にとれば、『三十六歌仙』(東京都立中央図書館、松花堂昭乗の瀧本流を例にとれば、『三十六歌仙』(東京都立中央図書館

- 前掲書)も参照されたい。

 「寛永の三筆と三十六歌仙 ―― 歌仙絵と歌仙和歌の系譜 ――」(注(3)とについては、新藤協三氏「『三十六人歌合』と入木道」(注(4)前掲書)とについては、新藤協三氏「『三十六人歌合』と入木道」(注(4)前掲書)とについては、新藤協三氏「『三十六歌仙和歌が書芸術と密接なかかわりをもつこに詳しい。また、寛永の三筆の三十六歌仙帖」(ともに東に著作の音楽)も参照されたい。
- 注(3)前掲書『江戸の歌仙絵――絵本にみる王朝美の変容と創意――』 おられる。
- (29) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(29) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(29) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」、光悦(29) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」、光悦(29) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(29) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(29) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(20) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(20) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(20) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(20) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(20) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(20) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(20) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦(20) 小松氏注(24)前掲書』を巻と同種と思われる。
- (拙書『松花堂昭乗と瀧本流の展開』思文閣出版、二○一一年)等。舎、二○○九年〉)、同「瀧本流の流行と展開「付瀧本流法帖出版年表稿」(楠元六男氏編『江戸文学からの架橋 ── 茶・書・美術・仏教 ──』〈竹林拙稿「印刷による書の再生 ──『本朝名公墨宝』の刊行について ──」

30

「日中比較による書学資料の文献学的研究」(代表者菅野智明、研究課題番号2本稿は、平成二十五年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費(基盤研究邸)

4320066) による研究成果の一部である。

【付記】 脱稿後、高橋則子氏「役者絵『見立三十六歌撰』について――文学と 、松会版『歌仙金玉抄』と『歌仙大和抄』の歌意絵の類似が指摘されている ことを知った。本稿第三章の両書のつながりを説く点において、高橋氏のご指 に立とを知った。本稿第三章の両書のつながりを説く点において、高橋氏のご指 で、松会版『歌仙金玉抄』と『歌仙大和抄』の歌意絵の類似が指摘されている で、松会版『歌仙金玉抄』と『歌仙大和抄』の歌意絵に注目されるのに対し、本稿は所 収和歌に基づいて論じたものであることから、敢えて掲載する次第である。な 収和歌に基づいて論じたものであることから、敢えて掲載する次第である。な 収和歌に基づいて論じたものであることから、敢えて掲載する次第である。な お、高橋氏は、『歌仙大和抄』について、松会版『歌仙金玉抄』とならんで お、高橋氏は、『歌仙和歌の歌意絵に一定のイメージを定着させていったと思 われる」とされ、歌意絵入り三十六歌仙絵本における史的意義についても述べ われる」とされ、歌意絵入り三十六歌仙絵本における史的意義についても述べ でおられる。

表《金屋版『歌仙金玉抄』・松会版『歌仙金玉抄』・『歌仙大和抄』 和歌収録順

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
右 大中臣頼基朝臣	左 斎宮女御	右 壬生忠岑	左 源公忠朝臣	右 藤原高光	左 中納言敦忠	右 中納言朝忠	左 中納言兼輔	右 小野小町	左 猿丸大夫	右 紀友則	左 素性法師	右 僧正遍昭	左 在原業平朝臣	右 山邊赤人	左 中納言家持	右 伊勢	左 凡河内躬恒	右 紀貫之	左 柿本人丸	立博物館本) 立博物館本)
左 藤原敏行	右 大中臣頼基朝臣	左 斎宮女御	右 壬生忠岑	左 源公忠朝臣	右 藤原高光	左 藤原興風	左 中納言兼輔	右 小野小町	左 猿丸大夫	右 紀友則	左 素性法師	右 僧正遍昭	左 在原業平朝臣	右 山邊赤人	左 中納言家持	右 伊勢	左 凡河内躬恒	右 紀貫之	左 柿本人丸	立諫早図書館本) (貞享元年刊。諫早市 松会版『歌仙金玉抄』
左 藤原敏行	右 大中臣頼基朝臣	左 斎宮女御	右 壬生忠岑	左 源公忠朝臣	右 藤原高光	左 藤原興風	左 中納言兼輔	右 小野小町	左 猿丸大夫	右 紀友則	左 素性法師	右 僧正遍昭	左 在原業平	右 山邊赤人	左 中納言家持	右 伊勢	左 凡河内躬恒	右 紀貫之	左 柿本人丸	館本) 北年印。東京国立博物 で記載

※歌仙の表記は底本に拠る。

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
中務	平兼盛	壬生忠見	大中臣能信朝臣	藤原仲文	三条院女蔵人左近	藤原元真	坂上是則	清原元輔	藤原興風	源順	藤原清正	源信明朝臣	源宗于朝臣	源重之	藤原敏行
右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右テ	右	左	右	左	右
中務	平兼盛	壬生忠見	大中臣能信朝臣	藤原仲文	三条院女蔵人左近	藤原元真	坂上是則	清原元輔	権中納言敦忠	右中納言朝忠(下巻)	源順	藤原清正	源信明朝臣	源宗于朝臣	源重之
右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	右	左	右	左	右
中務	平兼盛	壬生忠見	大中臣能信朝臣	藤原仲文	三条院女蔵人左近	藤原元真	坂上是則	清原元輔	権中納言敦忠	中納言朝忠	源順	藤原清正	源信明朝臣	源宗于朝臣	源重之